



TITLE:

唐宋時代に於ける福建の開発

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

CITATION:

日比野, 丈夫. 唐宋時代に於ける福建の開発. 東洋史研究 1939, 4(3): 187-213

ISSUE DATE:

1939-03-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138791>

RIGHT:

東洋史研究

第四卷
第三號

昭和十四年三月發行

唐宋時代に於ける福建の開發

日 比 野 丈 夫

元來福建は非常に開發の後れた地方であつて、宋以後文化に於いても産業に於いても著るしく進歩したけれども、唐の中頃までは殆んど開發の見るべきものがない。閩越或は閩中とも稱せられ、寧ろ南方に當る廣東方面が早くから開けてゐたのに反し蠻夷の境として永く顧みられなかつた。三國時代の呉の經略や晋の南渡後の開發に負ふ所も甚だ少なく、その後にも文化は微々として頗る振はなかつた。この地方に何となく開化の氣運が動き始めた様に思はれるのは唐も大分末に近附いてからのことである。而も宋代になるとかゝる形勢は全く一變した。宋代の文獻に現はれる福建は決して唐代の比ではなく、その發展は誠に刮目して見るべきものがある。さうしてこの状態は平和な北宋時代を通じて益々進められたのであつた。いふまでもなく、この變化は唐末より五代にかけて凡そ百年餘りの間に行はれたのであるが、かくも短年月の間に一地方の開發が著しく進んだことは支那史上に於いても類例の稀なことゝいはねばならぬ。

この問題に就いては早く桑原博士が論及されたのを始め部分的には先人の研究も少なくない。しかし乍ら私が進んで本篇を草する理由は、廣くあらゆる方面からこの間の事情を調査してその開發の跡を明らかにしたいと思ふと共に、先人の説き及ばれなかつた點をも補ひたいといふ氣持があるからである。

*新唐書地理志、通典州郡典に據るに唐の武德四年隋の建安郡を建州と改め州治を閩縣に置いた。六年建州を建安郡に移し閩縣の地に泉州を置く。景雲二年泉州を閩州と改め泉州を晉江縣に移した。開元十三年閩州を福州と改めたのでこゝに始めて福建二州の名が現はれた。福建と連稱するのは恐らく唐會要諸使雜錄上に「廣德二年九月。以太子詹事李峴。爲江南東西及福建等道知選事并勸農宣慰使。」とあるのが最初であつて、市村博士が興元元年が最初であるといはれた（東洋學報八卷一號「唐以前の福建及び臺灣に就いて」のは誤であらう。尙淳熙三山志（卷二十一）に福建經略使、福建都防禦使の名が乾元元年の條に見えるけれども確實な根據とすることは出来ない。

**桑原博士の「歷史上より見たる南北支那」（白鳥博士還曆記念東洋史論叢、支那文化史研究所收）には隨處に福建地方の開發に關する考證が盛られてある。しかしその他には特にこの時代に於ける福建の開發を専門に論じたものはない様である。昨年十一月東洋史談話會の席上で北山康夫氏が偶然にも本題と全く同じ談話を試みられその概要が本誌前號に掲載されてゐる。

二

福建の古代の歴史は頗る明らかでない。それ以前はもとより漢代に閩越とよばれた地方が果して今日の福建に當るかどうかといふことさへなほ疑問に屬するのであつて、今に論争が繰り返へされてゐる有様である。それは兎も角後漢の末になつて始めて閩江の流域に郡縣が置かれたことは疑なく、三國をへて晋の南渡後次第にその數を増して行つたものと見える。しかし六朝時代を通じて福建の狀態は依然雲煙の中に閉されてゐる。時たまこの地の太守縣令となつた人の傳を讀んでもたゞ士民の叛亂が絶えないことをいつてゐるに過ぎない。^①宋の王象之の

輿地紀勝には圖經を引いて、「晋の永嘉中衣冠閩に趣く。これより亂を畏れまた仕ふる者なし。故に六朝の間仕官名跡晦如たり。」など、記してゐるが大した根據がない。もとより永嘉の亂に中原の仕族が南に徙りその影響がこの地方にも及んだのは當然のことであつて、これに關する傳説も古くからある。中にも林、黃、陳、鄭の四姓のものが先づ閩に入つたといはれてゐる。閩の四姓に就いては陳書陳寶應傳に、「晋安侯官の人なり。世々閩中の四姓たり。」とあるのが最初の記事であらう。この陳氏は餘程有力な土豪であつたとみえ、陳の建國にも關係してゐるらしく文帝の時には一族が悉く宗室に編入せられたといふ。しかしやはり彼等は中原の人々からは文化の低い蠻族と考へられてゐたに相違ない。太平寰宇記には開元錄といふ書物を引いて、「閩縣は越州の地。今の建州もまたその地。皆夷種。五姓あり。林黃はこれその裔なりといふ。」といつてゐるではないか。

この地方がいつまでも開發が後れたのは全く地勢の關係によるのであつて、東は大海に迫り西北南共に山岳重疊して外界との交通を絶たれ、政治的には勿論經濟上に於いても中央との交渉は少なかつた。従つて山間や海濱には未開の民が多く、唐代の福建は殆んど貶謫された官吏の赴任地であつた。垂拱二年陳元光が漳州の建置を願つた上奏文には「況んやこの鎮は七閩を極め境は百粵に連る。左衽椎髻の半ばに居り、耕すべきはすなはち火田の餘。」とあるし、それから百年餘りもたつた元和の頃の人である劉禹錫の文にも、「閩は負海の饒あれどもその民悍にして俗鬼なり。洞砦にをり桴筏を家とするもの華言と通ぜず。」とのべてある。

とはいふものゝ唐代には郡縣の數も漸く増加し元和郡縣志によると五州二十五縣を數へるのであつて、隋志の一州四縣に比べると格段の差があるといへる。從來州縣が置かれたのは主として閩江の流域や海岸地方に限られてゐたが、この時代になると今まで顧みられなかつた山間の地にも置かれる様になつて來る。新唐書地理志をみ

ると、各地で頻りに塘坡が開鑿され溉田の増加して行つた消息が窺はれる。これは勿論唐の國力が充實し開拓の勢が自然に四方に及んだ結果ではあるが、特に安史の亂後に於ける戸口の南遷や、北支那の藩鎮獨立の爲に朝廷の財賦を悉く東南に求めなければならなくなつたといふ様な事情が大きな原因をなしてゐるのである。従つて唐末に近づくと共に次第にこの地方の資源が開發されて來た。茶鹽の利が人々の注意に上り、鑛山の開鑿が頻繁となつた。北支那の戰禍を避けて僑寓する人士も年と共に多きを加へたであらう。福建の文運を開いた人として後世から非常な尊敬を受けてゐる常袞が觀察使となつたのは建中年間であつた。こゝに面白いのは唐の中期以後福建出身の宦官が非常に多くその勢が甚だ強かつたことである。⑦唐代の玉泉子といふ書に、杜宣猷が宦官の力で陞進したことを述べ、「諸道每歲闔人を送る。いはゆる私白なるものは閩を首となす。且任用せらるゝこと多し。故を以て大闔以下桑梓多く閩にかゝる。時に以て中官の藪澤となす。」とある。⑧これは咸通時代の狀態であるが、福建の人々が強制的に宮刑を施され朝廷に上られた由來は更に古い。穆宗の皇后蕭氏が閩人であつたといふことも注意すべきことである。彼等宦官が京都と故郷との間を頻繁に往來したであらうことが、少なからずこの地方の開發に影響を與へたといふことも見逃してはならない。

しかしながら特にこの地方が著るしく開發されるのは唐末王氏がこゝに據つて閩國を建てた時からであらう。その祖王潮が閩に入つたのは光啓元年のことであるが、六年を経た景福二年には五州を手中に收め乾寧三年威武軍節度使を授けられた。當時支那は殆んど黃巢の軍に席捲されて至る所荒廢に歸し、殊に江淮以北は極目千里蕭條として人烟を絶つたといはれてゐる。福建も乾符五年一度は黃巢の馬蹄に蹂躪せられたけれども、王潮とその弟審知の努力によつて治安は回復し、北方には未だ戰亂が続いてゐるのに數十年の間平和が維持せられた。永く

開發を後らせた交通の不便は却つてこの地を戦火より救ひ文化向上の誘引となつたわけである。當時の記録は如何にこれを傳へてゐるであらうか。

王潮に就いては資治通鑑卷二百五十九

に、「閩地ほど定まる。潮僚佐を遣はして州縣を巡り農桑を勧め租税を定めしむ。好みを隣道に交へ境を保んじ民を息はしむ。閩人安んず。」とある。潮は乾寧四年に死んで弟の審知が後を

繼いだ。王審知には随分美談が多い。舊五代史本傳には「審知隴畝より起り以て富貴に至る。毎に節儉を以て自からをる。良吏を選任し刑を省き費を惜しみ徭を輕うし斂を薄うして民と休息す。三十年の間一境晏然。」といひ、五代史記閩世家にも「審知盜賊より起るといへども人となり儉約。禮を好み士に下る。王淡は唐相溥の子。

楊沂は唐相渉の從弟。徐寅は唐の知名の進士。皆審知に依つて仕官す。學を四門に建て閩士の秀なるものを教ふ。海中の蠻夷商賈を招來す。海上黃崎波濤阻をなす。一夕風雨雷電震擊開いて以て港となす。閩人以て審知の德政の致す所となし號して甘棠港となす。」とあつて北方知名の士を優遇し學校を興して文運の開發に力め、貿易の利に着目してこれを獎勵したことを傳へてゐる。王潮が王緒の部下として閩に入つた時には已に多數の流氓が従つて來た様である。平和が続くと各地から流れ込む農民や商工者は夥しい數に達したのであらう。新舊五代史の記事は共に于兢の瑯琊忠懿王德政碑や錢昱の忠懿王廟碑に基いたのであらうが、これ等の碑文は徒らに誇張の言を弄したものとばかりは考へられぬ。⁹⁾ 審知の兄たる泉州刺史審邦も新唐書本傳によると、子の延彬に招賢院を建てさせ名士を保護してゐたのである。¹⁰⁾ こんな有様であつたから人口も餘程増加し諸々の産業が興り福州や泉州が次第に港として繁榮して行つたであらうことが想像せられる。

審知から三代目の延鈞は始めて國を閩と號した(長興四年)。その後一代をへ延羲の時になつて建州刺史であつ

た兄の延政は獨立して殷國を建てた(天福八年)。吳越はこの機に乗じ閩國を滅して福州を合せ、南唐は建州を奪ひ、泉州二州が留從効の下に半ば獨立の状態を續けた。^①留從効が二十年の間泉州に據つた結果、この港は一段と發展を遂げたであらう。

後世閩國の苛酷な誅求を非難する人は多い。明の黃仲昭は八閩通志^{卷二}に、唐代には未だ開發が進まず産業も

起らなかった、然るに王氏が區々たる數州の地を以て國を建て極端な收斂を行つた爲に民力が涸渴した、といつてゐる。成程、王延鈞の如きは奢侈に耽り神仙術に惑はされて盛に土木を起し薛文傑を國計使に任じて歛財を行

つた。建州に國を建てた殷に至つては一層甚だしく、資治通鑑^{卷二百八十三}に依れば、「殷國小にして民貧、軍旅やま

ず。楊思恭聚斂をよくするを以て幸を得たり。田畝山澤の税を増し魚鹽蔬菓に至るまで倍征せざるなし。國人こ

れを楊剝皮といふ。」といはれる程であつた。しかし相當の誅求は五代の如き亂世にあつては何れの國にも免れ

なかつたであらう。特に閩國が甚だしかつたとしても、この地方は從來開發が後れ物産にも乏しかつた爲に外國

貿易を奨勵し中原の士を招いて學術に産業にあらゆる方面の開拓に力め國力の充實を計つたといふ點に注意しな

ければならぬ。人々は流徙の苦痛を忍んでも戦火に荒らされない平和な天地を求めて移つて來たであらう。況ん

や福建の如き未だ開拓の充分進まなかつた地方は彼等の力に俟つべきものが多かつたに相違ない。來るべき次の

時代に於けるこの地方は如何なる形で我々の前に現はれるかを見よう。

註 ① 梁書卷三十九羊侃傳、同卷四十二臧厥傳。

② 輿地紀勝卷百二十八福州の條。

③ 例へば太平御覽卷百七十に梁載言の十道志を引き、「泉州清源郡。土地與長樂同。東晉南渡。衣冠士族多萃其地。以求安堵。因立晋安郡。宋齊以後因之。唐景雲二年置泉州。」とある。

- ④ 太平寰宇記卷百福州の條。太平御覽卷百七十にも同文を載せ夷種を蛇種に作る。
- ⑤ 全唐文卷百六十四「請建州縣表」
- ⑥ 劉夢得文集卷二十九「福州國練薛警神道碑」
- ⑦ 二十二史劄記卷二十「唐宦官多閩廣人」の條參照。又唐の裴庭裕の東觀奏記卷下に于延陵が建州刺史に除せられた時宣宗が延陵にいつた言を載せ「朕前後左右皆建人也。」とある（通鑑大中十二年十月の條參照）が、思ふに閩出身の宦官が多いことをいつたものであらう。
- ⑧ これは有名な話で新唐書宦者傳上吐突承璀傳にも通鑑咸通六年正月の條にも見える。私白の意義については桑原博士が自宮の意義に説かれ（東洋史說苑所收「支那の宦官」、清水泰次氏之に反駁し（史學雜誌四三の一「自宮宦官の研究」、曾我部靜雄氏が桑原説を支持された。（歴史と地理二九の五「私白宦官の意義」、又桑原博士支那法制史論叢所收「唐明律の比較」閹割火者の條參照。
- ⑨ 王審知に關する新舊五代史の記事は何れも于兢の瑯琊忠懿王德政碑（全唐文卷八百四十一）と錢昱の忠懿王廟碑（全唐文卷八百九十三）に基く。共に彭元瑞の五代史記注にも收められてゐる。前者は舊唐書哀帝紀天祐三年の條に見える。七史商榷卷九十七「王審知事蹟」、常盤博士「支那佛教史蹟記念集」及び同評解參照。
- ⑩ 黃滔御史集卷五「丈六金身碑」には天祐四年審知が福州開元寺の丈六金銅佛の開眼供養を營んだ時、列席した多數の北方の名士の名を上げてゐる。
- ⑪ 留從効も善政を布いたらしい。路振の九國志卷九（粵雅堂叢書本）には「從効起自行陣。知人疾苦。勤儉養民。常衣布。素涉獵史傳。延納名士。部內清治。吏民愛之。」とある。

三

以上唐より五代にかけての開發の經過を簡單に述べた。その結果は如何に現はれて來るか。先づこれを戸口統計に就いて見てみよう。唐の中頃から宋にかけて北支那の戸口が夥しく南に遷つたのは周知の事實である。それにしては福建程その變化が著るしい地方は少ない。次に唐の開元より南宋に至るまでの戸數を上げ并せて全國戸

數との比較を考へてみる。

年 代	福建地方の戸數	出 典	全國の戸數	出 典	全國に對する 比 率
唐 開 元 中	一一、五三一 ^萬 一	元和郡縣志	八四一、二八七一 ^萬 (二十八)	舊唐書地理志	〇、〇一四
天寶元年	九、五五八六	新唐書地理志	八八三、七一八五	同上合計	〇、〇一一
元 和 中	七、四四六七	元和郡縣志	二四七、三九六二	唐會要卷八十四	〇、〇三一
宋 太平興國中	四六、七八〇八	太平寰宇記	六四九、六五四一	同上合計	〇、〇七二
熙寧十年	九九、二〇八七	文獻通考卷十一 所引中書備考對	一四八五、二六六八	同上	〇、〇六七
元豐元年	一〇四、四二三五	元豐九域志	一六四九、九三二三	同上合計	〇、〇六三
紹 興 中	一三三、餘 ^萬 (五年)	建炎以來繫年 要錄卷九十六	一一五七、五七三三 (三十年)	同上卷百八十七	〇、一一五
嘉定十六年	一五九、九二一四	文獻通考卷十一 所引國朝會要	一二六七、六八〇一	同上	〇、一二六

*開元の戸數は元和郡縣志によつたが汀州を缺いてゐるので太平寰宇記で補つた。大體元和郡縣志と寰宇記との開元の戸口は非常に出入があるが福建に關する限り合計に大差がないので便宜上さうした。元和志は脱漏が多く天下の合計を出すことが出来ないで已むを得ず舊唐書に依つた。天寶元年の新唐書地理志の合計は加藤博士の「宋代の戸口を論じて其の前

後の變遷に及ぶ（『東洋史講座卷十四』）に依る。

※ 太平寰宇記の皇朝戸は甚だ粗雑で兩浙路の如きは餘りに少なすぎるのであるが、福建に關する限り大した誤はないと思ふ。何となれば、續資治通鑑長編太平興國三年四月に泉州節度使陳洪進が漳泉二州の戸十五萬一千九百七十八を獻じたとあり、寰宇記の二州の戸合計十五萬五千二百八十八と大差を認めない。寰宇記の全國合計には古佚叢書に收めた通行本にない六卷の分をも加へて計算した。熙寧十年、元豐元年の年代考定及び九域志の全國合計は加藤博士の「宋代の主客戸統計」（史學十二卷三號）に依る。

これに依れば唐代福建の戸數は開元天寶の盛時に於いてさへ十萬を上下し全國に對して僅か百分の一強に過ぎない。安史の亂後様々の理由から統計に現はれる天下の戸口は激減した。その度合は北支那に於いて著るしく、南方では寧ろ増加してゐる所さへあるのは、いふまでもなく南支那が戰禍に見舞はれること少なく、比較的生活も安定してゐたので北方より流徙して來る人口が多かつた爲である。福建地方がさ程の減少を示さず、天下の戸數合計に對して三十分の一弱の比率を保つてゐることは、實際に於いてこの地方の戸口は増加したものと認むべく、この傾向は唐末に至るに従つて益々著るしくなつて行つたことと思はれる。太平寰宇記に見える宋初太平興國中の戸數が全國的に増加してゐるのは戸籍の整備した結果であらう。それにしてもこの時に於ける福建の戸數は四十七萬に近く唐の盛時に比して五倍といふのは驚くべき飛躍である。全國に對する比率も十三分の一に迫つてゐる。如何に人口の増加が多かつたかゞわかるではないか。州縣の數も八州軍四十五縣に上つた。特に建州は五代に（南）劍州を、太平興國五年に邵武軍を分つた。この州は浙江江西と堺を接してゐる爲に各地から入りこむ流民も多かつたわけで、「五方の俗を備ふ。」とさへ稱せられてゐる。泉州が太平興國四年興化軍を分つたのは、外國貿易の發達による戸口膨脹の結果である。更に百年を経て熙寧元豐時代になると戸數は益々増加して百萬を

突破した。元豐九域志に依れば福州や泉州の戸數は二十萬以上に達し、建州も十八萬を越えてゐる。これ等の州城は何れも北宋末に於ける全國有數の大都會であつたのであらう。^②南宋になると淮水以北の地を失つたので、それだけ福建の全國に對する重要度は増したわけで愈々戸口の數が増加したのも當然の勢であつた。次に文化や産業の開發狀態を一瞥しよう。

- 註① 八閩通志卷三に建安志を引いて、「自五代亂離。江北士大夫豪商巨賈多避難于此。故備五方之俗。」とある。新唐書地理志によると天寶元年の建州の戸數は二萬二千七百七十、太平寰宇記によれば、建州九萬四百九十二、南劍州五萬六千六百七十、邵武軍四萬七千八百八十一、合計十九萬五千四十三。更に元豐九域志では三州軍の戸數合計五十萬に達する。^②九域志に依つて戸數二十萬以上の府州を上げると、開封府、京兆府、洪州、吉州、潭州及び福州、泉州の七に過ぎない。福建路に於いては汀州、邵武、興化の三州軍を除いた五州軍は戸數十萬を越えてゐる。

四

この地方の文化開發が唐末に至るまで遅々として進まなかつた有様は進士の數を見れば最も明白である。南宋の梁克家の三山志^{卷二}_{十六}に、「唐神龍より後唐の天成にいたるまで二百二十有三年。進士に擢んでらるゝ者三十六人。何ぞ才の難きや。あにその出づるに時あるか、はた山川風土の然らしむるか。そも〳〵教化涵養のいまだ至らざるなり。」とある様に全く教化の及ばなかつた爲である。福建の中でも最も開けた福州がこの狀態であつたから他は推して知るべきである。従つて官吏登用試験も嶺南や黔中と共に南選が行はれたこともあつた。^①福建では神龍元年登第した福州の薛令之が最初の進士といはれてゐるが、その後續くものが絶えてなく漸く八十年餘りもたつて貞元七年泉州の林藻、翌年には同州の歐陽詹が相次いで及第した。^②これは大曆七年福建觀察使となつた

李椅や、建中元年に觀察使となつた常袞が學問を奨勵した結果である。獨孤及の福州都督府新學碑銘昆陵集卷九には「閩中儒家流なし。成公(李椅)至つて俗易る。」とある。常袞に就いては新唐書の本傳に「始め閩人いまだ學を知らず。袞至つて爲に郷校を設け文章を作爲せしめ親から講導を加ふ。ともに客主となつて禮を鈞しうし觀遊燕饗あづからしむ。これより俗一變し歲貢の士内州と等し。」とあり、最後の一句は誇張に過ぎるがこの頃から漸く進士も出る様になつた。しかしながら試みに八閩通志によつて唐一代の進士の數を見ると僅か五十七人に過ぎず又大した人物も出てをらぬ。南宋末、福州の陳普は勉學詩を作つて「人をして唐書を讀むに忍びざらしむ。」と嘆じてゐる程ではないか。^③唐末北方名士のこの地に避難するものが多く、王氏がこれ等僑寓の士を優遇して學校を興し教化に力めたことは前述の通りであるが、その結果各地に學問が起つた。福州や泉州などの中心地ばかりでなく、泉州の莆田縣の如きでさへも贊寧の宋高僧傳には「^④その邑唐季衣冠の士の僑寓多く、儒風振起す。小稷下と號す。」といふ記事がある。

かくて培はれて來た文化の種子は宋代になると一時に芽を出したかの觀がある。進士の數も年を追つて多くなつた。三山志をみても宋朝に至り彬然として人物の輩出したことをいひ、科目を以て進むものが建中靖國以後特に多いことを指摘してゐる。吳育、曾公亮、陳升之、吳充等の如く宰相の位に上つた人も少なくない。中にも新法黨を代表する呂惠卿、章惇、蔡京といった人々が福建出身者であつたことは特に注意しなければならぬ。呂惠卿は反對黨から常に福建子の綽名を以て呼ばれた程或意味に於いては福建の爲に氣を吐いた人である。思ふに福建は文化が新しい爲に、人々は進取的で因襲に拘束されず、又中央にも有力な先輩がゐなかつたといふことなどは彼等をして自由に手腕を振はせることが出來た事情ではあるまいか。これは後にのべる新興の學問である道學

の隆盛についてもいへるであらう。歐陽脩から「真に一代の文豪なり。」歸田と賞讃せられた楊億や、又能書を以

て「本朝第一」宣和書譜卷六

と推賞せられる蔡襄、更に北宋詞壇の第一人者といはれる柳永なども北宋時代にこの地方

から出た人である。神宗の熙寧九年には興化軍から文武兩魁を出して天下を驚嘆させたことさへある。宋の南渡

と共に中原の名族の南してこの地に入るものが多く、爲に文化は益々開發された。登第者の多いことは天下無比

といはれ人物は踵を接して現はれた。八閩通志卷四十六に、「宋興り閩八郡の士名第を取ること芥を拾ふが如し。相挽

引して臺省に居るもの卿相を歴て世に絶たず。天下を擧げて第を得るの多きをいふもの必ず閩を以て首稱とな

す。」とあるのも南宋に關する限り過言ではない。殊に學界に於いては道學の代表的碩儒が輩出してゐる。北宋

末に出た楊時を始め、游酢、胡安國、王頻、陳瓘等何れも福建出身者であるが、朱熹が建陽に晩年を送つてから

この地は永く道學の淵藪となり、學界に大きな影響を與へたことは更めていふまでもない。學問の普及と書籍の

出版とは密接な關係がある。已に北宋の末から閩版の書物が天下を風靡してゐたことは著るしい事實で、それが

南宋になると益々盛となり、建陽縣の麻沙、崇化兩坊は圖書の府とさへいはれた。^⑥このことは當時出版の盛であ

つた杭州や成都が文化の中心であつた様に、福建もまたその一中心であつたことを物語るものであつて、殊に南

宋になると道學が榮え天下の學生が欽然としてこゝに集つたことや、當時の應學者の數が天下無雙であつたこと

などと合せ考へねばならぬ。

佛教が興るのもまた唐末からである。三山志卷三十三に福州では宣宗の頃から漸く佛寺の建立が盛になり、王氏が

閩に入ると急激にその數を増し、吳越が短年月の間に一層多くの寺を造つたといつてゐる。宋高僧傳(特に禪習部)

を見ても閩中出身の僧は元和、大和の頃から現はれ、唐末五代にかけて特に多い。この地方の文化がこれ等僧侶

の手に依つて開發されたことも無視することが出来ない。王氏の佛教信仰はどうであつたか。王審知が義存とそ
 の高弟師備(共に閩人)を尊敬し頻りに財を捨て、寺塔を建立したことは黃滔御史公集卷五や忠懿王廟碑にくはし
 い。義存は福州の雪峯山にあつて數百の弟子を擁し禪學の一權威として閩浙の間に教化を布き、その門には師備
 を始め神晏、慧稔等の高足が現はれた。中にも師備は福州の玄沙院に住し審知の厚い歸依を受けた。^⑦平生儉約を
 重んじた王審知にして華麗な堂塔や佛像を造り金泥の藏經を寫して佛教を獎勵した理由は、やはり當時未だ文化
 程度の低かつた閩人を教化するのに宗教の力を藉るの必要を認めたからであらう。^⑧實際福建の佛教を開いた人は
 王審知であるといつても過言ではない。更に閩國の諸王は皆佛教に心酔して僧尼の保護に力めてゐる。資治通鑑
 に、「閩王延鈞民二萬を度して僧となす。これより閩中僧多し。」後唐天成三年十二月とあり、二代後の曦に關しても「又民
 を度して僧となす。民重賦を避けて多く僧となる。凡そ萬一千人を度す。」後晉天福五年七月と見える。かくて佛事は豪奢
 を極めたので、この頃から誅求が激しく行はれる様になつた。それは兎も角福州や泉州は五代以來佛國とさへ稱
 せられ、^⑨北宋の天禧の頃には江浙福建の僧尼の數は天下に半ばすと傳へられてゐる。^⑩北宋時代已に福州で二種の
 大藏經が開板された事實も容易に領き得るではないか。即ち一は元豐より崇寧にかけて完成された東禪等覺院
 本、二は政和より南宋の初めに亘つた開元寺本である。殊に前者は宋板の藏經として蜀板に次ぐ古いものであ
 り、しかもそれが主として民間で計畫され信者の寄進に依つて完成されたといふ事は當地の彫板業が最も盛んで
 あつた事と共に注意しなければならぬ。^⑪

註 ① 桑原博士「歷史上より見たる南北支那」備考二十五。

② 歐陽脩には韓愈に「歐陽生哀辭」があつて有名であるが、これ等唐代の福建の人々の傳記は唐末の人黃璞の閩川名士傳

に收められてゐた筈である。

③ 道光福建通志卷五十八。

④ 宋高僧傳卷十三「梁撫州曹山本寂傳」

⑤ 輿地紀勝卷一百三十五。神宗御製の詩をのせて「一方文武翊天下。萬里英雄入轂中。」とあり、これに註して、「薛奕熙寧九年武舉第一。時徐鐸亦進士第一。神宗御製詩賜之。」といふ。

⑥ 内藤博士「宋元板の話」(東洋文化史研究所收)、長澤規矩也氏「宋板の話」(昭和八年五月宋刊本展覽會陳列書解説附録)
⑦ 義存の傳は宋高僧傳卷十二、師備は同卷十三に見える。義存のは「福州雪峰山故真覺大師碑銘」(黃滔御史公集卷五)に基く。

⑧ 國立中山大學語言歷史研究所週刊第七集第七十六期以下に魏應麟氏が「五代閩史稿」(未完)を書き「宗教與神語」といふ章に王氏が代々盛に佛寺を建て彼等の傳記が神話化されてゐることを説き、これを福建文化の過渡時代の特徴であると稱してゐる。閩國の佛教に就いては常盤博士「支那佛教史蹟記念集評解」に詳しい。

⑨ 輿地紀勝卷百二十八福州の條所引陳師尚賀徐中丞啓、「三山鼎峙。疑海上之仙家。千刹星聯。實人間之佛國。」方輿勝覽卷十二泉州の條「五季以來實共推於佛國。」

⑩ 章如愚「山堂考索後集」卷六十三。福州の寺田が民田に比較して多いことは青山定男氏が「宋元の地方誌に見えたる社會經濟史料」(東洋學報二十五卷二號)に指摘されてゐる。

⑪ 常盤博士「支那佛教史蹟記念集評解」一九六頁。藏經影版に關する宋代の記事としては三山志卷三十三東禪院の條に「崇寧二年因進藏經加號崇寧萬歲：有大藏經版」とあるのを補ひ得る。開元寺の條には關係記事がない。

五

宋代の福建に就いて忘れることの出来ぬのは茶の産出である。唐の陸羽の茶經には全國の茶の産地を説き、終りに福建等十二州を上げて「福州は閩の方山に産す」と注してゐるが、「未だ詳かならず。往々これを得ればその味極めて佳し。」とある。陸羽は貞元末に死んだ人であるが、當時福建の茶は彼の様な斯道の達人にも餘り知ら

れてなかつたのであらう。しかるに唐國史補^{卷下}には「福州方山之露あり」と已にその品名を上げ、新唐書食貨志には穆宗の長慶元年鹽鐵使王播が天下の茶税を増した時のことをいひ、「江淮、浙東西、嶺南、福建、荆襄の茶は播自からこれを領す。」とあつて、この時代になると産額も殖えその名をも知られる様になつて來たことがわかる。

宋代には福建の蠟面茶といふものが最も良質の茶として貴ばれた。北宋の初から製法も改良され就中建州の茶が宮廷の御用に供されたのは有名な事實である。蠟面茶の名は唐末から記録に見える。舊唐書哀帝紀天祐二年の條に、「七月丙申勅す。福建毎年橄欖子を進む。このごろ閩賢閩中より出づ。嗜好の間に牽かれ遂に貢奉の典となす。忠蠶を嘉すといへども伏して煩勞を恐る。今後はた蠟面茶のみを供進せよ。その橄欖子を進むるはよろしく停むべし。」とあるのが最も早い。蠟面茶は福建の特産であつて、字は蠟(蠟)、藟等にも作られるが宋の程大昌は蠟を正しいとなしてゐる。^① 兎も角唐六典、通典更に下つて元和郡縣志の貢賦の條にも茶が見えないのに新唐書地理志福州の土貢には茶と橄欖が上げられてゐる。これは先の舊唐書の文を参照しても唐末のことを記したものとすることが明らかである。太平寰宇記には福州、建州、南劍州、汀州^(邵武軍は土產建州に同じとあり)の土産に茶とあり漳州には蠟茶とある。

五代閩國の治下にあつた時から已に建州では優秀な茶を産した様である。馬令の南唐書^{卷二}には南唐が建州を下した翌年の保大四年二月の條に、「建州に命じて的乳茶を製せしむ。號して京挺といふ。藟茶の貢これより始まる。陽羨の茶を貢するをやむ。」とある。陽羨とは常州義興縣のことで唐の上供茶の産地であつた。文雅を好んだ南唐にあつては製茶の技術も頗る發達し、研膏とか宋代になつて最も貴ばれる龍、鳳とかいふ茶も已に作られ

てをつた。^②宋代帝室の御用茶を製した建安の北苑といふ有名な茶園も南唐の時に始つたのである。宋の太宗が南唐の制に倣つて北苑を供御の茶園と定めて以來建茶の名は天下を風靡した。初はたゞ龍、鳳二種の團茶が最も上等の品として御飲に供せられたが、咸平中轉運使となつた丁謂、天聖中の蔡襄、熙寧間の賈青等何れもこれに改良を加へて益々精巧な茶を作り名品が相次いで出たことは、當時の茶錄や筆記類にしばしば記されてゐる。北苑茶が最も精絶の域に達したのは恐らく自から大觀茶錄を作つた程の風流天子徽宗の時であつたであらう。蠟茶は宋史食貨志にも、「以て歲貢及び邦國の用に充つ。」とあり、特別の扱を受け私販の禁も他の茶より嚴重で、嘉祐四年通商法が行はれた時にも蠟茶のみは例外として禁權によつた。^③從つてその産額も年々増加した。江少虞の皇朝類苑^{卷六}に楊文公談苑を引いて、「江左近日蠟面の號あり。李氏別にその乳を取つて片を作らしむ。或は號して京挺、的乳、及び骨子等といふ。每歲五六萬斤に過ぎず。今歲に訖つて三十餘萬斤を出す。」とある。產地は主として建、南劍の二州であるが、仁宗の天聖元年の歲課は三十九萬餘斤、同九年には五十萬斤^{續資治通鑑長編卷百九十}祐三年には建州のみでも七十九萬斤に達した。^{宋史食貨志}元豐七年には轉運副使王子京の言に依ると年産額建州は三百萬斤、南劍州は二十餘萬斤であつた。^{續資治通鑑長編卷三百四十九}

甘蔗や木棉などの重要な特産物も記してをく必要がある。甘蔗は南支那では古くから栽培され砂糖も已に南北朝時代から製造されてゐたが、福建で甘蔗を産する確實な證據は宋代になつて始めて現はれる。大觀本章^{卷十三}に引用された仁宗の頃の人である蘇頌の圖經本草に、泉福吉廣の諸州では甘蔗が栽培されその汁から砂糖を製造してゐる記事がある。^④溯つては太平寰宇記の福州や泉州の土産に甘蔗があり、福州には尙「乾白沙糖^今貢」と記してゐるのは、この地方の甘蔗栽培の起原が相當に古く白沙糖さへ作られてゐたといふことは製糖技術の甚だ進歩し

てゐたことを示すものであらう。又南宋の王灼の糖霜譜に依ると、當時この地方では糖霜が作られてゐた。南宋を経て元になると福建の製糖業は盛大を極めた様である。元初この地を旅行したマルコ・ポーロは當時宮廷で使用する砂糖は全部福州附近から供給され、その量は金額に見積ると莫大な數に上ると稱してゐる。^⑤

木棉樹の栽培は唐代嶺南や四川では已に行はれてゐた様であるが、閩に關してはやはり宋代から記録に見え。北宋末の方勻の泊宅編卷中にこの地方で木棉樹が栽培されこれから吉貝布が織られることを傳へてゐる。南宋の謝枋得の疊山集卷五に、八閩の地は蠶桑のことには適しなくても木棉といふ天産があつてそのお蔭で農家も貧を憂へずに活して行ける、極く隣接せる江南の饒州や信州では養蠶は盛だが木棉は全く産しない、天道はうまくしたものだといふ意味の詩がある。これに依つても福建の木棉は宋末まで重要な特産物であつたわけで、その北方に移植される様になつたのは元初からのことである。^⑥

その他荔子だとか橄欖子だとかいふ菓實も宋になると俄然福建のものが有名になる。唐代では荔子といへば専ら蜀と嶺南とが知られてゐた。しかし宋初の陶穀の清異錄卷二には「嶺南の荔子もとより閩蜀に逮ばず。」ともあつて、就中興化軍の海岸に産するものは最も質がよく莆田荔子の名を恣にした。南宋の羅大經の鶴林玉露卷四には、唐代には閩の荔子などは全く知られなかつたが、今では閩の品は最も奇妙で蜀のものはこれに比すると香味共に僕視すべきであるといひ、時代の進むと共に未開の地が次第に開拓されて優秀な産物のみならず、人物もこれ等新しい地方から出る様になつたことを論じてゐる。蔡襄は荔子譜を作つて閩産の有名な品目を列舉した。閩の荔子は天下第一の稱を得て士大夫の間に賞美せられ、宋代では荔子といへば直ぐに閩中を聯想する程であつた。

この地方では宋代に著るしく鑛業が發達した。續資治通鑑長編卷七十九に天禧五年現在の天下の鑛産州軍名を列記

した中に、福、建、漳、汀（銀の條に河南劍、邵武の六州軍は銀、銅、鐵、鉛何れの條下にも記されてゐる。但し漳州は鐵の條になし泉州、興化軍を除けばこの路は非常に鑛產物が豊富であつたことがわかる。唐代に於いては六典、通典の各州郡の土貢の條にも元和郡縣志にも福建に關しては一も鑛物の記載がない。然るに新唐書地理志には次の如く記されてゐる。^⑦

福州 福唐(鐵) 連江(鐵) 尤溪(銀、銅、鐵)

建州 建安(銀、銅) 邵武(銅、鐵) 將樂(金、銀、鐵)

泉州 南安(鐵)

汀州 長汀(銅、鐵) 沙(銅、鐵) 寧化(銀、鐵)

これに依ると唐末盛にこの地方の鑛山が開發されたことが窺はれる。

就中宋代になつて急に産額の増したのは銀である。宋會要食貨第十三には銀坑冶祖額と元豐元年收總計を各路別に載せてあるが、これは抽分と和買とを合せた政府年收の統計である。前者は熙寧末年の統計と考へられるのであつて、これに於いて福建は産銀十一路中第四位を占める。元豐元年には各路共に激減したに拘らず、福建獨り増加して第一位に上り六萬九千兩、總收二十一萬五千餘兩の殆んど三分の一に當る。文獻通考卷二所引畢仲衍の中書備對に元豐間諸路二節進奉銀の條があり、福建路が同天節及び南郊進奉銀并せて三萬七千兩、諸路中第一位であることは右の事實を裏書きするものである。しかもその大部分は南劍州の產出であつた。太平寰宇記卷百建州龍焙監の條に「本州の地銀鑛を出すを以て皇朝開寶八年場を置き銀銅を收む。太平興國三年昇せて龍焙監となす。凡そ七場を管す。」とあり、建安縣の銀は宋初には相當の産額があつた様である。さうして寰宇記卷百は唐代

から既に銀產地として著はれてゐる尤溪、將樂、沙等の縣を管下を含む南劍州に就いては一言も鑛産に觸れてゐない。しかるに南劍州の銀産額は熙寧末より元豐の初めにかけて當路の第一にあり、且元豐九域志に龍焙監が見えないことを以てすれば、この監は或は元豐の初頃廢されたのではないかと考へられるのであつて、この頃には南劍州の産額が急激に増加し建州の方は減少したのであらう。^⑨

宋會要食貨^{第三}_{十三}に依ると銅の産額に於いても、當時全産額の大部分を出した廣南東路には遙かに及ばないけれどもこれに次いで第二位を占め、主として福、建、南劍の三州に産した。鉛も全國屈指の産額を有してをつて殆んどすべてが南劍州の所産である。^⑩しかし鐵の産額は問題にならぬ程少なかつた。

これ等の統計に依れば北宋時代南劍州は銀鉛の産額では全國で一二を爭ふ程に達し、有數の盛な鑛業地であつた筈である。南宋になつても福建路が鑛業地として榮えたことは、文獻通考^{卷十}_八所載嘉定中の臣僚の上言に代表的の鑛産地を上げ、銅銀共産として建州浦城縣の因獎、南劍州尤溪縣の安仁、杜唐、供面子坑、銀鉛共産として建州建安縣の永興場を數へてゐるのに依つてもわかる。財源を求めるに急であつた南宋に於いてはこれ等鑛山は益々擴張せられ産額も一層増加したであらう。

福建は銅の産出が多かつたので咸平二年豐國といふ鑄錢監が置かれた。宋會要食貨^{卷十}_一に淳熙九朝通略を引いて、「初め鑄錢たゞ饒州永平、池州永豐あるのみ。咸平二年宰臣張齊賢いふ。今錢貨いまだ多からず。望むらくは使臣を擇んで銅を出し薪炭を得易きの處を按行せしめ監を増置して錢を鑄んと。乃ち虞部員外郎馮亮等に命じて建州に至り豐國監を置き、江州に廣寧監を置く。云々」とあり、以後毎年凡そ二十萬貫の銅錢が鑄造せられた。^⑪建州に監が置かれたのはこゝが産銅地である外に交通の便も考慮に入れられたものであらう。豐國監は南宋の初

頃一度鑄造を罷めたことがあるが、やがて舊に復し宋末に到つた。

註

① 十七史商榷卷七十六臘面茶の條にこの舊唐書の臘に作るは誤りであるとして「臘當作蠟。原本誤同。」といひ、松井等氏が「其の茶を蠟茶といふは蠟面の意味にして其の色蠟の如く黄を帯びたるが故なるべし。」(滿鮮地理歷史研究報告第五「北宋の對契丹防備と茶の利用」一六三頁)といはれ、共に根據を示されてないが、程大昌の演繁錄續集卷五の次の文に據るの外はない。「建茶名蠟茶。爲其乳泛湯面。與錦蠟相似。故名蠟面茶也。楊文公談苑曰江左方有蠟面之號是也。今人多書蠟爲臘。云取先春爲義。失其本矣。」

② 研膏茶のことは江少虞の皇朝類苑卷六十所引楊文公談苑に見え、龍鳳茶は宋史南唐世家に見える。

③ もつとも續資治通鑑長編(卷三百四十九)元豐七月十月の王子京の上言によると熙寧三年にはかりに全國的に通商を許されたことがあつた様である。

④ 加藤博士はこの記事を李時珍の本草綱目より引用し、福建の甘蔗栽培が唐代にまで溯り得るであらうと想像されてゐる。「支那に於ける甘蔗及び砂糖の起原に就いて」(東亞經濟研究四卷三號)

⑤ Marco Polo (Yule and Cordier P. 226) は福州から十五哩離れた Unken といふ町が最も砂糖の産出の多いことをいひ、この町の人は以前は砂糖の精製法を知らなかつたが、元の領土に入つてからバビロニヤ人が來て改良せられたのだと云つてゐる。Moule et Pelliot 版 (P. 155 r.) には Vuguen に作る。これを何處に比定するかは疑問でユールは Pauthier が候官に當つたのを不可とし距離の上からは閩清の外なしといふ。尙別に永春縣を主張する Phillips の説を掲げてゐるが、これは到底成立しない。宋代甘蔗の産地は福州附近では三山志卷四十一に、「候官甘蔗州最盛。」とあるのゝ Vuguen 又は Unken と云ふ町には適當な地名が當嵌らないがどうしても福州附近でなければならぬ。

⑥ 疊山集卷五「謝劉純父惠木綿布」。趙翼の陔餘叢考卷三十「木綿布行於宋末元初」の條參照。

⑦ 鐵物を産するといふことゝこれを貢賦として上るといふことゝは別であるが、金銀の如きは少しでもこれを産する州郡は皆これを貢賦としてゐることは通典卷六に見える通りであり、銅鐵にしても有名な鐵山は元和郡縣志には一々記載してある。然るに福建では新唐書以外には左様な例がもなく又食貨志等にも獨立して現はれてゐる記事もない。あらゆる情勢から推してこの地方の鐵山は多く唐末より開かれたものであらう。加藤博士「唐宋時代に於ける金銀の研究」第二分冊五〇二頁參照。

⑧ 日野開三郎氏は「北宋時代に於ける銅鐵の產出額に就いて」なる論文(東洋學報二十二卷一號)に於いて、宋會要坑冶部

に見える銅の元額を考證して熙寧八年より十年に至る三年の平均と認めてゐるが、銀の場合も同様であらう。

⑨ この寰宇記に見える龍焙監を加藤博士は太平寰宇記産銀地表に脱してをられる様である。龍焙監は續資治通鑑長編卷九十七天禧五年現在の産銀地の中にも見えるが、この監に關する最後の記事は宋會要食貨(第三十三)の坑冶監場を記した所に龍焙監舊置とあり、これは熙寧十年までのことを記した六朝國朝會要に依つたものと思はれるからこの監は元豐九年域志に記されてないことと併せ考へれば恐らく元豐の初年に廢されたのであらう。次に宋會要に見える銀産額の統計表を示す。

銀坑冶元額		元豐元年收
福州	一六四〇兩	二八二一兩
建州	一、〇二七	八八一二
泉州	三	四
南劍州	二、五六一〇	五、一二二七
汀州	四〇七五	二二二〇
邵武軍	四二九〇	二九〇一
漳州	五五〇	九一五
計	四、六四四五	六、九〇〇〇
全國	四一、一四二〇	二一、五三八五

⑩ 宋會要に見える鉛産額

福建路		南劍州	全國合計
熙寧初年	二三一、五八七四斤?		七九四、三三五〇
熙寧末年	九七、二一六二		八三二、六七三七
元豐元年	一〇九、五四五九	八九、五六八〇	九一九、七三三五

⑪ 史學雜誌四十六編一號所載日野開三郎氏「北宋時代に於ける銅鐵錢の鑄造額に就いて」には宋會要に依つて知り得べき年の鑄造額を上げてゐる。尙建炎以來朝野雜記甲集卷十六に依り「大觀中豐國二十四萬四百」とあるのを補ひ得る。

六

古くから福建の海岸が南海航路の寄航地として利用されたことはいふまでもないが、福州や泉州が國際貿易港として史上に現はれるのは唐の中期以後である。文苑英華^{卷三百七十一}所載、唐の大曆時代の人である包何の「送李侍君赴泉州」といふ詩に、「傍海皆荒服。分符重漢臣。雲山百越路。市井十州人。執玉來朝遠。環珠入貢頻。連年不見雪。到處即行春。」とある。泉州が海外交通の一門戸に當り諸外國貢使の來朝が頻繁なことをいつたものであらう。桑原博士は「蒲壽庚の事蹟」の中に於いて諸種の適確な證據を上げて、唐の中世以後アラビヤ商人が盛に福建の海岸に來て通商したこと、中にも泉州は最も早く彼等蕃客の爲に開かれた港であることを證明されてゐる。舊唐書懿宗紀咸通三年五月の條に、南蠻が交趾に寇したので湖南より湘江を溯つて灘水を下り廣州へ軍糧を輸送した時水運の不便に苦しんだことをいひ、「潤州の人陳磻石闕にいたり上書していふ。江西湖南より流を汭つて糧を運ぶ、軍師を濟はず。士卒食盡くればすなはち散ず。これ宜しく深慮すべし。臣奇計あり、以て南軍に饋らん。天子磻石を召見す。因て奏す。臣が弟聽思曾て雷州刺史に任ず。家人海船に隨つて福建に至る。往來の大船一隻千石を致すべし。福建より船を裝へば一月ならずして廣州に至る。船數十艘を得ばすなはち三萬石を致して廣府に至るべし。云々」とあり、この計は採用せられて嶺南の康承訓の軍は食糧難を免れたことがある。^①これによれば當時福建は港として相當に發達しこの地で海船に乗降する人も多かつたらしく、廣州と福建とを連絡する客船も通じてゐたことがわかり、アラビヤの商人がやつて來て貿易に従事した事情も明かとなる。造船業も盛であつたとみえ、唐大和上東征傳に依ると鑑眞は第四回目の東征の時に杭州から使を出し輕貨を携へて福州へ舟

を買ひにやつた。太平寰宇記の福州や泉州の土産の條には海舶がある。又福州は日唐交通の上にも重要な關係があつた。貞元二十年弘法大師が漂着したのは別として、大中七年入港した智證大師は開元寺で一天竺僧から悉曇章を授かつてゐる。^②當時この港と九州の間を往來した支那商人は相當にあつた様である。

しかしアラビヤ商人が盛にやつて來て福州や泉州が貿易港として急激に發展したのは恐らく唐末王氏がこゝに據つたときからであらう。王審知が海中の蕃夷商賈を招來し或は甘棠港を開いて船舶の出入を容易にしたことなどは既に述べた。瑯琊忠懿王德政碑に、「佛齊國照臨を同じくすといへども、冠裳を襲ぬるなく舟車通すること罕にして琛賫獻するなし。□者も亦滄海を踰えて鴻臚に來集す。これ乃ち公示すに中孚を以てしその内附を致す。異類といふといへども亦華風を慕ふ。宛土の龍媒いづくんぞ獨り往史に稱せられるのみならんや。條史の雀卵まことに前聞を繼ぐべし。」とある。王氏が閩に據つたのは、廣州が黃巢に陥つて間もない頃でソレイマンに依れば^③その時多數の外國商人が殺戮せられ市街は荒廢に歸し西方との交通が一時衰微した時であつたから、王氏の海南招來は相當の成功を収めたであらう。唐會要^{卷百}に「天祐元年六月福建道佛齊國入朝進奉使都蕃長蒲訶栗に寧遠將軍を授く。」とあるのは德政碑の佛齊國云々の記事に應ずるものである。「三」佛齊國の蒲姓といへば恐らくアラビヤ人であるべく、王審知の招來に依つてその地の商人が入朝しその推薦で唐の朝廷から將軍號を授けられたのであらう。五國故事^{卷下}には泉州に知した王審知の兄審邦と子の延柳の三十年間のことをいひ「乃ち歲豐稔ならば毎に蠻船を發す。失墜するものなし。人よつてこれを招寶といふ。」とある。五代が亡んだ後泉州を保つた留從効は益々貿易を獎勵しその收入に依つて獨立を維持してゐたと想像される。

さて宋代になるとこの地の外國貿易に關する記事は頗る多い。宋初から外舶の泉、福、漳の諸州に入港するも

のが多かつたことは宋會要^{食貨}市舶等に散見する。従つて蕃商のこゝに滞在する者が増し、この地の商人も頻りに海外に航し貿易に従事してをつたので既に熙寧の頃から泉州に市舶司の設置が朝議に上つてゐた。結局市舶司は哲宋の元祐二年泉州に置かれ、その官制は屢々變化したけれども、紹興十二年から專任の提舉市舶が任ぜられる様になつて宋末に及んだ。元祐以來泉州の貿易は愈々繁榮に趨き、政和宣和の頃には已に兩浙即ち杭州や明州を凌いでゐたであらう。泉州刺史陸藻が、「泉は京師を距つる五十有四驛。海外の國三十有六島を連ぬ。城内坊を畫すること八十。生齒無慮五十萬。」と稱したのは宣和二年のことであつた。^⑤

嘉祐時代の人である謝履は泉南歌を作つて、「泉州は人稠にして山谷瘠す。就いて耕さんと欲すといへども地の闢くなし。州南海あり浩として窮りなし。毎歲舟を作つて異域に通ず。」といつたが、大體山が多く土地の磽确な福建路は北宋時代から人口に比して耕地が少なく農家の生活は困難であつた。文獻通考には中書備對に依つて熙寧末年の各路墾田の頃數^{卷四}と、各路の主客戶統計^{卷十}とを載せてゐる。これに依れば福建路は墾田の數に於いては第十四位にありながら戶數は第六位を占めてをるのであつて、以てこの地方の生活狀態を想像することが出来る。南宋時代沿海の州軍では食料の不足を廣州からの米で補つてゐた。^⑦これ等の事情は當然海外貿易を促し更に海外移住をさへさせたであらう。又狡猾な商人の中には脱税等の目的を以て好んで海外に居を構へたものもあつたらしい。續資治通鑑長編^{卷二百七十三}熙寧九年三月の條に、「詔す、福建廣南の人商賈によつて交趾に至る。或は彼に留つて事を用ふるものあるを聞く。自今その親戚所在に於いて自から陳ずるを許し招討司をして招諭せしむ。もし能く自から歸へるものは班行を與へん。」といつて歸國を獎勵してゐる。司馬光の涑水記聞^{卷十}には慶曆二年泉州の商人邵保といふものが私財を投じ人を募つて海賊を占城まで追つて行き捕へ歸つた話を載せてあ

る。この地方の商人の海外發展の勢は如何にも驚くべきものがあつたわけで、續資治通鑑長編には泉州の商人の占城や高麗へ頻りに出かけて行つた記事が散見する。中には高麗の商人と結托して彼等に貢使と稱せしめ朝廷の賜與の幾分を食ふ様な惡辣なものもあつた。^⑧商人のみではなく船の乗組員として東南海上に活躍してをつた福建人は一層數が多かつたことと思はれる。

南宋になると貿易港としての泉州は遙かに兩浙を壓し杭州に近いといふ地の利をも占めて益々榮へ次第に廣州をも凌駕する様になつて來た。北宋末の戰亂にもこの地が比較的兵火の害を被ることが少なかつたのに反し杭州や明州が屢々宋金交戰の巷となつたことも忘れてはならない。泉州城の南郊には蕃坊が設けられ黑白數多の蠻人がこゝに群居して貿易業に従事し、その多數を占めるアラビヤ商人の中には鉅萬の富を擁して頗る豪華な生活を營むものも少なくなかつた。宋末より元初にかけて泉州の繁榮は頂點に達した。マルコ・ポーロの旅行記にザイツンの名の下に世界最大の貿易港として記されてゐることなど更めていふ必要もあるまい。

こゝでは全體に互つて桑原博士の「蒲壽庚の事蹟」によつたことはいふまでもない。成田節男氏の「宋元時代の泉州の發達と廣東の衰微」(歴史學研究六卷七號)をも參照した。

註① 資治通鑑卷二百五十にはこの記事を咸通四年七月の條にかけ、有司の不正や風濤の爲にこの計畫の功が少なかつたことをいふ。

② 大正藏經第五十五卷智證大師將來目錄。松本博士「智證大師將來目錄に就いて」(園城寺研究所收)

③ Reinaud ; Relation des Voyages tom. I P. 12. P. 64.

④ 藤田博士「宋代の市舶司及び市舶條例」(東洋學報七卷二號)

⑤ 輿地紀勝卷百三十所引陸守修城記に依る。陸守とは乾隆泉州府志卷十一城治の條に「宣和二年郡守陸藻築。外磚內石。」とある陸藻のことである。

⑥ この詩は輿地紀勝卷三十所引。謝履の傳は八閩通志卷六十七に「字履道。惠安人。嘉祐中第進士。」とある。

南宋初の方々の泊宅篇卷中に「七閩地狹瘠。而水源淺遠。其人雖至勤儉。而所以爲生之具。比他處終無有甚富者。云々」とあつてこの地方農民の生活は困難であつたらしく、一路の生活を維持するものは商工業であつたらう。無有甚富者といふのは農家に就いていつたもので、大地主の如きも發生しなかつたであらう。この路が上供の多いのに比して兩税が少ないのは耕地の面積が少ないからである。

⑦ 眞文忠公文集卷十五「申樞密院乞修沿海軍政」に「又福泉興化三郡全仰廣米。」とあり、同卷「申尙書省乞措置收捕海盜」にも「兼福興漳泉四郡全靠廣米。」と見えてゐる。

⑧ 續資治通鑑長編卷四百六十五。

七

以上唐宋時代に於いて福建地方が如何に開發せられたかを各種の方面から論證した。内容が多岐に亘つた爲、個々の問題に就いて十分な解決點に到達し得なかつた所があるのは遺憾である。紙數の都合から一々の證據を省いた場合も少なくなく、しかも尙叙述の横道にそれたことも多かつた。こゝに結論を述べれば、從來著るしく後れた福建の開發は唐の中期に及んで漸くその緒に就き、唐宋五代の間に於いて劃期的な發展をなした。これが平和な宋代になると年一年と完全な生長を遂げ北宋の末に於いては既に各方面共に可成り成熟の域に達した。實際宋人にとつてもこの間の變化には驚くべきものがあつたであらう。北宋末の宋子安は東溪試茶錄の序に「七閩國朝に至り草木の異は則ち藟茶荔子を産す。人物の秀は則ち狀頭宰相を産す。皆前代未だあらざる所。時を以て顯はる美なりといふべし。」と述べてゐる。^①王應麟も困學紀聞^{卷十}に、「閩俗中州に比べて善に化すなり。蔡人夷貊に過ぎて惡に化すなり。」といつてをる。^②この地方に赴任する官吏に對する送別の詩などを見ても唐と宋とでは餘

程趣きが違ふ。宋になると氣瘴癘だとか俗兇暴だとかいふ様な形容は餘り目に觸れないで、建茶や荔子の産地として士大夫に親しまれ、雪を知らぬ南國の風物は彼等の心を惹きつけるものがあつた。諸々の産業は大いに發達してこの地方の富は急激に増加し已に北宋の末に於いては東南六路に次ぐ富裕な地方となつた様である。文獻通考^{卷二}十三に重和元年の諸路上供錢物の數を上げてゐる中に、福建路が第六位を占めてゐるのは注目するに足る。南宋は北宋に比して領土は半減したけれども、富饒な東南地方に據つてゐる上に種々の新税目を設けて極力收入の増加を計つたので、その歳入は北宋の盛時に匹敵することが出來た。しかしその大部分は軍費に食はれ殊に國境駐地軍に要する費用は莫大であつた。兩淮、湖廣、四川の財賦は軍の稟給を主る總領所に專斷されて上供に屬せず、政府の費用はたゞ閩浙等數路の出す所に俟つといふ有様であつた。^③かくの如く南宋の初からこの地方は政府の重要な財源地帶となつたので、表面に現はれる文化の華やかさに反して寧ろ疲弊の聲さへ聞えてゐるではないか。元來宋代の状態をもう少し書く積りであつたが紙數の制限と時日の切迫の爲他の機會に譲ることとする。

註 ① 郡齋讀書志卷十二所引。東溪試茶錄一卷は百川學海や說郛局九十三に收められてゐるがその何れにもこの文は見えない。著者の名は讀書志には朱子安とあるが百川學海本及び宋史藝文志に宋子安とあるを正しいとする四庫提要に従ふ。

② 蔡州が特に唐の中頃以來風俗の悪くなつたことに就いては顧祖禹が讀史方輿紀要卷五十に論じてゐる。

③ 山堂群書考索續集卷四十六所引陸渚の館職策に依る。總領所のこととは同書卷四十五「今日總司之財」、建炎以來朝野雜記甲集卷十一、十七の諸條、或は止齋先生文集卷二十「吏部員外郎初對劄子第三」等に見える。

〔附記〕 本編は昭和十一年大學に於ける卒業論文の一部である。若しこれが何等か益する所ありとすればそれは全く指導を辱

くした諸先生の賜に外ならぬ。(昭和十四年二月十五日)